

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	統括部局：教務機構	担当部局：教務機構
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科) 《全学的な視点》	
中項目	6.3 教育方法	
小項目	6.3.1 教育方法および学習指導は適切か。	
要素	教育目標の達成に向けた授業形態(講義・演習・実験等)の採用 履修科目登録の上限設定、学習指導の充実 学生の主体的参加を促す授業方法 研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導(院) 実務的能力の向上を目指した教育方法と学習指導(専院)	
小項目	6.3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。	
要素	シラバスの作成と内容の充実 授業内容・方法とシラバスとの整合性	
小項目	6.3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。	
要素	厳格な成績評価(評価方法・評価基準の明示) 単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性 既修得単位認定の適切性	
小項目	6.3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。	
要素	授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施	

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 各教員が研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導を行う。	→指導要領の作成	C	C	C	C	C
2. 授業評価等を実施することによって授業改善への取り組みを推進する。	→学生による授業評価アンケートの回収率、大学院FD部会の開催	C	B	B	B	B
		☆				
2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	C	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 大学院FD部会にて検討を各研究科に依頼し、順次各研究科にて策定し、2011年度に全13研究科(国際学研究科開設は2014年度)で学位取得プロセスモデルの策定が完了した。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 学位取得プロセスモデルやフローの作成を完了し、教員、学生の双方が手続きを共有することができたが、在学期間内の学位取得を含んだ教員用の指導要領は各研究科とも作成できていない。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 学位取得プロセスモデルやフローにより、教員、学生の双方が手続きを共有するで目標や指導内容は理解できるようになった。指導要領については、必要性が高いものであると認識するのであれば、作成を検討するが、現状ではあまり必要性がないと考える。	☆
		その他	☆

目標2	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 教務課(教務機構)にて、毎年度、各研究科の回収率、各研究科FD委員会の設置や開催回数を確認してきた。また、授業調査用紙についても大学様式か研究科独自様式かを確認。ただし、回収率向上やFD委員会開催は各研究科での対応に大きく依存する。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 一部研究科では回収率が大幅に向上したが、多くの研究科では実施回による変動がある。研究科内のFD委員会は、ほとんどの研究科で設置され、委員会実施回数も増加した。その他、アンケートをもとに大学院生会と懇談の場を持つなど、大学院の各種改善に役立っている。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 大学院教育において求められるカリキュラム、授業改善に関する情報の提供を教務が継続して行い、各研究科の教育改善を支援する。	☆
		その他	☆
			☆
備考			☆